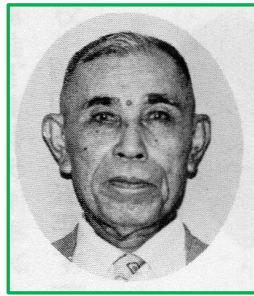




25号で、『すくすく育て玉黄金ぬ宝』という言葉を作られたのは、田検生まれで心から島と子どもを愛した渡武彦さんであったことを紹介しました。

この渡武彦さんは、子どもたちにどんなことをされていたのか調べてみました。



奄美郷土研究家の先田光演先生が書かれた「心から島と子供を愛した建築技師 渡武彦」(平成5年12月発行『郷土の先人に学ぶ第4集』)の中に書いてありました。どの学年の子どもにも分かるように、言葉を少し書き加えて紹介します。

1 むかし話の上手な武彦じいさん

暑い日差しが、だんだんとやわらぎはじめる午後5時ごろになると、海岸のガジュマルの木陰に子どもたちがさそい合ってやってきました。木陰には、一人の老人(武彦じい)が杖を片手にすわっていました。

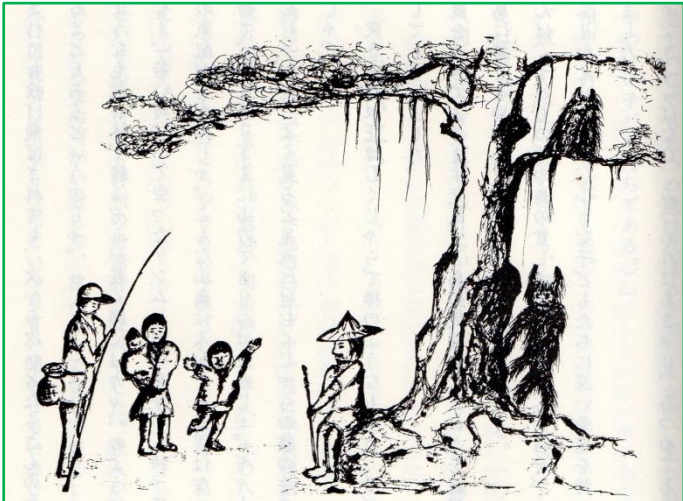
「武彦じい、また来たどー。今日もおもしろい話ば、お願いしんしょうろ。」

「ケンムンの話ば、お願いどー。」

近くの川でタンガをとっていた男の子も、びく(かご)を下げたままやってきました。背中に赤ちゃんをおぶった女の子も、急ぎ足でやってきました。

武彦じいは、子どもたちの声を聞くと、

「おおー、今日も来たか。よう親の加勢ばしておるな。いい子だ、いい子だ。いいか、このガジュマルの木には、大昔からかわいいケンムンが住みついておるといことじゃ。」(本の中にある挿し絵「話をする武彦じい」)



武彦じいは、集落の子どもたちをやさしいまなざしで見つめながら、ほほえんでいます。すると、「ケンムンは、昼間はおらんちいうが、今はまだ出ん

時間よねー。」

「わんのおとらが、ケンムンを見た人の話ばしようたど。武彦じい、ケンムンは、ほんとおるんかい?」「うん、おるんど。ケンムンは、奄美大島では大昔から人間と仲良くくらししておったのじゃ。人間に魚のとり方をおしえたり、森を守ったりしておったんじゃが、海のタコがたいへんきらいで、だんだん人間からはなれてしまい、ときどきいたずらをするようになってしもうたちゅうど。すもうが大好きで、夜中に歩いている人間に、すもうをしかけてきたりしたそうじゃ。人間から投げ飛ばされても投げ飛ばされても、次から次にケンムンがあらわれて、その人は、一晩中すもうをとられたこともあったんど。」

「ケンムンは、どんなかっこうをしておるんかい?」「猿のような毛深いからだで、ひざごぞうが長く、あたまにはカップのような皿があるという人もおる。わしはなあ、若いときに山で会ったケンムンの手を、今でも持っておるど。」

「えっ、ケンムンの手をかい?」

「うん。山で木を切っていたらうしろで人の気配がしたのじゃ。おかしいな、こんな山奥に人が来るはずがないが〜。そうじゃ、うしろにいるのはケンムンにちがいないと心に決めて、わしは、くるっとうしろを振り向いて山刀で切りつけたのじゃ。ギャーッという悲鳴が聞こえたが、だれもおらんじゃった。」

子どもたちは、武彦じいの話をくぎ付けになって聞いていました。

「なんか、切れたのかい?」

「わしは、回りをよーく見渡したんじゃ。すると、わしの足元に、毛むくじゃらの猿の手のようなものが落ちとった。」

「はっげー、もしかしたら、ケンムンの手かい?」

「(箱を開けながら)ほらッ、これが手じゃが!」

武彦じいは、話の終わりに箱の中から突然毛むくじゃらのものを子どもたちに差し出しました。子どもたちは、キャーッと大声を上げ、その場から逃げ出してしまいました。

2 子どもたちへの深い愛情を持った武彦じいさん

武彦じいさんは80歳を過ぎてからも元気で、島の民謡やことわざを記録に残し、子どもたちがふるさと奄美大島に誇りを持つことを願っておられたそうです。

『いきやなきよらばなむ、みつめればあきゆり、みつめてあかんむば、わーたまぐがに。』という島唄が大好きだったそうです。

「どんな美しい花でも見つめ続ければあきてしまうが、見つめても見つめてもあきないのは、わたしのかわいい子どもたちである。」という意味です。

(文責 福田裕生)